

公開授業と秋のFDワークショップ 議事録

2021年12月23日

蚊野 浩

公開授業

12月22日(水)、9:00~12:15、基礎プログラミング演習Ⅱの4クラスで実施した。この公開授業の目的は、プログラミング系演習(基礎プログラミングⅠ、Ⅱ、発展プログラミング演習)の教員リソース(基礎プロⅠ8名、Ⅱ4名、発展プロ3名)の検討の材料とすることである。参加者は13名であった。

FDワークショップ

FDワークショップを、12月22日、13:15から14:45に、Teams会議にて実施した。

参加者:27名、新實、伊藤(浩) 荻原、中島、宮森、河合、荻野、安田、玉田、田中、奥田、伊藤(慎)、赤岩、林原、棟方、小林(聡)、井上、平井、秋山、永谷、大本、水口、川村、玉田、瀬川、岡田、蚊野

司会:蚊野

アジェンダ:

- (1) 教育カリキュラムとコース制を検証するための委員会からの報告(奥田先生)
- (2) 情報理工学部が関係する教育カリキュラムの有効性の状況把握(蚊野)
- (3) 留年率改善のための方策と修学支援(寺子屋)の運用に関する状況報告(蚊野)

1. コース制の検証委員会からの報告(奥田先生)

事前に公開された以下の資料の中で主にaを用いて説明があった。

- a. コース検討報告_2021秋FDWS.pdf
- b. 【資料4】進路内定先一覧.xlsx
- c. 情報理工学部・設置の趣旨20170425.pdf

報告内容は、資料aの通りである。その中のいくつかについてだけ示す。

- (1) コースごとの選択者数は、年度によらず安定している。ある程度の多い/少ないがある中で「コンピュータ基盤設計コース」が、特に選択者が少ない。
- (2) 非選択コースの要件を達成しているが、選択コースの要件を未達で、留年した学生が1名いる。
- (3) 総じて言えば、コース制の導入はポジティブに機能した。コースの特色がよく出ているコース、それほどでもないコースは存在する。

- (4) 抽象的な表現にはなるが、「より魅力的な学部」、「学生にとって修学意欲が増す学部」、「大学進学意欲が増す学部」、を目指してバージョンアップしていくことが必要。
 - (5) 「組み込みコース」に関する意見として、他大学で行われている組み込み系のカリキュラムを導入するなど、特徴をよりはっきりさせることが考えられる。
 - (6) 本学の学生の傾向として、単位修得の容易さを優先する学生が多いので、高度な授業を導入することの是非は総合的に考える必要もあろう。
- など。

2. 情報理工学部が関係するカリキュラムの状況把握(蚊野)

共通教育で情報理工学部が担当している科目と担当教員の一覧を示した。長い期間で見れば、学部の教員であっても共通教育を担当する可能性が高いことを確認した。最近の10年ほどは、全学的に新学部設置が続いたので、共有教育のカリキュラムを変更することができなかった。2022年度からは、そのような制約がなくなるので、情報理工学部が担当する科目を変更できることを説明した。

3. 留年率改善のための方策と修学支援(寺子屋)運用の状況報告(蚊野)

春のFDワークショップで説明したように、低単位学生に寺子屋の利用を勧めることは意味がなかった。オンライン寺子屋は通年で活動し、学生に勉学での困った問題が発生した時の拠り所として、一定の機能を果たした。2022年度は、対応学生を1名として、継続を希望した。

留年する理由は2つあり、第一は学校に来ないこと。第二は授業に出席しても最終的に単位を落としてしまうこと、である。第一に対しては保護者を巻き込んだ低単位指導面談で対応し、第二に対しては授業の質を落とさず合格率を上げる、という方策が必要である。今後、具体策を講じていく必要がある。これに関して次のような意見があった。

- a. 定期試験だけで成績評価する科目は合格率が低くなる傾向にある。
- b. 宿題やレポートを出す場合、学生の負担が多くなりすぎないようにする必要はあろう。
- c. 科目ごとの履修合格率、受験合格率などの数値を有効に活用するのが良い。
- d. 4年留年率 20%台にすることを一つの目安としたが、価値の高い教育を提供することが重要なのであって、必ずしも留年率を下げれば良いとわけではない。